本名を名のること

在日朝鮮人三世の金正美（キムジョンミ）さんは、クラスで本名宣言（自分が朝鮮人であることを明らかにし、本名を名のること）をしました。次の文章は、金さんが本名宣言した後に、自分の思いを書いたものです。

私は、在日朝鮮人三世の金正美（キムジョンミ）です。朝鮮が日本の植民地だったころ、強制連行、または土地を奪われて、日本に渡ってきた人たちが一世です。

一世というと、私の祖父母になるわけですが、日本へ来て言葉も通じず、食べ物をもらいに歩いたり、ボロ買いをしながら生活していたそうです。いつか朝鮮へ帰ろうと思っていた人たちばかりだったのですが、しばらくの間、日本と朝鮮の国交がなく、朝鮮戦争がはじまって、一世は同じ在日どうしで結婚して、二世が生まれたことで生活に追われ、その結果、現在の生活基盤が日本にできてしまったわけです。

二世の人たちは、一世の親たちの話す朝鮮語や朝鮮の歴史を聞いて、いつも祖国への熱い思いを胸にしてきました。私の父や母も同じです。でも、ほとんどの人は故郷である朝鮮に帰ったことはありません。日本の教育を受けて、日本で生活してきました。一世に比べて、私は、朝鮮人としての意識が弱くなっていることは確かです。

その二世から生まれた三世の人たちは、全くといっていいほど朝鮮語は話せないし、朝鮮のこともよく知らない人が多いのです。二世以上に朝鮮人としての意識は弱いだろうと思います。

でも幸運にも私は、ほかの朝鮮人よりも朝鮮に囲まれて育ってきたと思います。家の中では、朝鮮語がよ

く使われるし、朝鮮料理を食べ、お盆にはチェワと呼ばれる朝鮮の行事もします。兄二人は朝鮮学校に通っていました。母にはよく「朝鮮人として誇りを持って生きなさい。もし差別されたら、朝鮮人がどうしていけないのかと言い返しなさい。絶対に負けてはいけない」と言われてきました。

でも実際、学校でいじめられると言い返すこともできずに黙り込んで泣いてしまいました。（どうして朝鮮人だと差別されるんだろう）自分でもわからないまま、朝鮮人であることを隠しているところがあったと思います。朝鮮という言葉がでると、みんなの反応が気になって、みんなの表情を見まわしていました。

自分が朝鮮人だといった後のみんなの言葉、態度がとても怖かったのです。

でも隠してびくびく生きるのはとてもつかれます。自分に正直に生きたいと思ったとき、私は朝鮮人であることを明らかにしたいと思いました。自分が朝鮮人であることをいやがって生きたこともあります。でも、朝鮮人として生まれてきたのだから、本当の朝鮮人として生きたいし、自分の本当の姿をみんなに出して、朝鮮人としてつき合ってもらいたい。そう思ってもやはり、差別の重さに身がすくみました。

本名を名のることで、私は本当に朝鮮を隠すことなくみんなとつき合っていけたらいいという願いがあります。自分にも相手にも朝鮮人であることをはっきりさせることで、私のうちにある民族的自覚を確かなものにしていく契機となります。

クラスで、本名を名のったあと、感想を書いてもらいました。私の気持ちをわかってくれる人がいて、本当にうれしかったです。みんなが、私をキム・ジョンミと呼んでくれることで、私自身も朝鮮人として生きてゆく決意がわいてきます。そうしないと、朝鮮に対する偏見や差別に負けて、通名に逆もどりしてしまう弱さもあります。

本名を名のることは、私自身の生き方の問題だったのです。正直に生きられたらいいと思います。正直に

誠実に生きることで、まわりのみんなもそのことに応えてくれたらうれしいと思います。

日本と朝鮮の間に不幸な関係があったことは事実ですが、そのために、私たちの世代までもが、自分の本名を名のれないとしたら、やはり悲しいことです。民族の違いは違いとして認め合い、偏見や差別のない日本と朝鮮の関係をつくりあげることができたらと思います。

また別の中学校でも、朴（パク）、李（リ）、姜（カン）の三人の生徒がクラスで本名宣言をしました。その本名宣言を、クラスの生徒は次のように受けとめました。

A君

僕は初めから朴のことは知っていたから、今になって朝鮮人であるといってもどうってこともない。日本人であろうが、朝鮮人であろうが、今は日本に住んでいるのだからそんなことはどうでもいいことやし、気にせんほうがいい。

B君

これまで私が思っていたことは、朴君や李さん、姜君が朝鮮人だということを知っているけれど、そんなことを忘れて普通にしていればいいということだった。ちょっとひねくれた日本人よりは三人ともよっぽど話しやすかったし、おもしろかった。でも今まで思ってきたことはまちがいだった。三人は朝鮮人なのだから、そのことを忘れてはいけないのだと思った。なんか朝鮮人と呼ぶことが、かわいそうだということが頭にあったと思う。でも、朝鮮人だということを忘れていようと思ったことが、三人へのぶじょくだと思った。

これからは、きちんと本名で呼びたいと思う。最後に、二年生の時からみんな知っているので、すごくいい性格だと思う。三人とも今まで同じように仲良くしたい。

本名を名のること（中学校向け）

A　教材設定の意図

人権学習においては、差別の事実と、その背景の歴史を正しく認識することが重要である。そして差別された人々の痛みを知り、その思いに共感するところから取り組みは始められる。

在日外国人登録者は、一九九八年現在では一〇〇万人を越え、そのうち約六八万人が韓国・朝鮮人（以後、民族を総称して朝鮮人と呼ぶ）であり、その割合は徐々に減ってきてはいるが、もっとも多い。そしてその子どもたちの多くは、日本の公立小・中学校で日本人生徒と生活を共にしている。しかし、本名を名のっている生徒はきわめて少なく、多くの場合、通名（日本名）を名のっている。このことは、朝鮮人生徒を取り巻く状況がいかに厳しく、差別的であるかを物語っている。

多くの日本の社会認識は「朝鮮」を「劣っている・低い・悪い」などのマイナスのイメージでとらえており、生徒たちはそういうおとなたちの朝鮮観をそのまま身につけている。そのような日本社会、そして日本の学校の中で本名を名のるということは、並大抵のことではない。そして本名宣言するまでの心の葛藤はすさまじいものであるに違いない。

朝鮮人であることを隠して生きることの方が、世間の流れに逆らわないで生きられるのにという想念にかられながらも、本名を名のる、つまり、朝鮮人として生きることを選択するということは、人として正直に、誠実に生きたいという、当たり前の思いを大切にすることである。それは、民族の魂を呼び覚まし、日本に同化を強いられてきた生き方を、一八〇度転換する作業でもある。

本名宣言とは、このように厳しい生き方を選択することであるから、日本人生徒も、それをきちんと受け止めなければならない。一般的に提起された差別の問題は、具体的な自分の問題としてとらえ返すことで、初めて有機性を持ったものとなる。差別を生み出しているのは差別されている当事者ではなく、実はまわりの人間なんだということに気づいたとき、自分はどうなのかというとらえ返しができていく。朝鮮人生徒の被差別的な状況も、日本人がつくり出しているのであり、本教材をとおして、日本人生徒にまず自分の問題としてとらえさせ、考えさせるようにしたい。

在日朝鮮人の差別の問題を考えることをとおして、日本人生徒の意識を揺さぶり、自分自身のとらえ返しにつなげてほしい。また、今まで下を向いて黙っていた朝鮮人生徒の生き方を励まし、元気づけてほしい。こういう思いで本教材を設定した。

B　教材の解説

金正美の作文は、彼女が高校生になってクラスで本名宣言をしたあとに書いたものである。また、二つの感想文は、ある中学校で、三人の朝鮮人生徒の本名宣言を受け、同じクラスの日

本人生徒が書いたものである。金正美とA・Bは、同じ教室で学んでいた生徒ではなく、時間的にも少しずれはあるが、朝鮮人生徒の思いや日本人生徒の気持ちをよく表している。

金正美の作文は、これまでの生き方を反転させることで、真実な生き方を探り当てようとする思いを語っている。その中で彼女は「自分が朝鮮人だと言った後のみんなの言葉・態度がとても怖かったのです」と述べている。この言葉は、十数年間肌で感じてきた差別の重さが、彼女に語らしたものである。一九九〇年の松任市の民族差別落書き事件で明らかなように、差別は解消されるどころか、ますます陰湿になってきている。

朝鮮人生徒が本名宣言をすることで、まわりの日本人生徒の意識のありようが鮮明になってくる。これまで民族のことなど意識しなかった日本人生徒に緊張感を持たせる。「朝鮮」など視野に入っていなかった日本人生徒にしてみれば、自分自身の朝鮮観が問われるわけである。

Aは「気にせん方がいい」と言う。「朝鮮人とか日本人とか関係ない。仲良くしていればいいのだ」という一見もっともらしい言葉の裏にある、誤った意識を見事に浮かび上がらせている。朝鮮人であることを「気にせんでいい」ということは、本名宣言した三人が、朝鮮人として生きようとすることを否定することに他ならない。民族的自覚を確かなものにしたいと願う金正美や朴、李、姜たちの思いをまったく受け止めていない。

Bは「今まで思ってきたことは間違いだった」と、朝鮮人と出会うことで自分のこれまでの考え方があやまりであったと気づかされていった。朝鮮人生徒の思いに触れ、今までの自分の存在をとらえ返すことができたのである。そして、「本名で呼びたい」と、朝鮮人と認めたうえでのつき合いをとおして、より深い人間としての関係をつくろうとしている。

本名宣言は、それをしっかりと受け止めてくれる仲間づくりが土台としてなければならない。そのためには様々な重荷を背負った生徒に対する取り組みをとおして、本名宣言を受け止められる集団を育てる必要がある。

C　指導上の留意点

① 学級に在日朝鮮人生徒がいる場合、授業はその生徒の存在を無視しては進められない。授業に取り組む以前に、その生徒を取り巻く状況を把握し、子や親と、朝鮮を軸にした関わりが必要となる。その中で、授業についての話し合いも、しっかりとしておきたい。

② 授業はあくまでも在日朝鮮人生徒を励ますもの、元気づけるものでなければならない。

③ 日本と朝鮮との関係の歴史については、教材研究を深めておいて授業にのぞんでほしい。

④ 本名宣言をAのように受け止める生徒はたくさんいるだろう。正しい受け止め方の押しつけにならないように、学級内での討論を深めて理解し合ってほしい。

D　参考

・石川の人権教育第2集「出会いを求めて」（一九八七年　石川県教組）

「同化から自立をめざす」

砂上昌一（加賀市立錦城中学校…当時）

E 授業の展開例

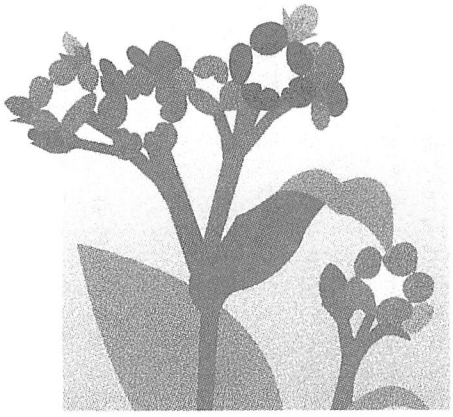
教師の基本発問・助言	生徒の活動・指導の要領
一　導入 ①日本に住んでいる外国人で、いちばん数の多いのはどこの国の人か知っていますか。	①朝鮮人だという答えがでてこなければ、教師の方から示す。経緯については、教材の作文の中でおさえる。
二　展開 ②在日朝鮮人がどういう思いで生活しているのか考えてみましょう。 ③金さんが、それまで通名で学校に来ていたのはなぜでしょう。 ④通名で学校に来ていたとき、金さんはどんな気持ちだったでしょう。 ⑤金さんは、どんなことを願っているのでしょう。 ⑥A君とB君とでは、受け止め方が違っています。どこが違うのでしょう。	②教材（プリント）を読ませ、背景のわかりにくい部分を補足する。 ③在日朝鮮人に対する日本社会の差別性について気づかせる。就職差別（国籍条項）、年金に関する不利益な扱い、選挙権のないこと等に触れてもよい。 ④「朝鮮」という言葉が出るたびにびくびくしながらも、朝鮮人であることを隠して生きることは、自分を偽って生きることであるということの間で葛藤していたということを読みとらせる。 ⑤本名宣言をきちんと受け止めてほしいこと、そのうえで日本人と在日朝鮮人がよりよい関係をつくることを願っている。 ⑥在日朝鮮人が本名宣言をした思いを受け止めているのはどちらかを意見を出させ十分に討論させたい。そして、差別は、差別される当

三　まとめ ⑦「差別を生み出しているのは当事者ではなく、まわりの人間なんだ」という観点から、自分の出会った友達のことについて考えてみよう。	事者に問題があるのではなく、まわりの人間の問題なのだということに気づかせる。 ⑦しんどい思いをしている友達のことや、差別の問題について作文を書かせる。 作文で書かせた生徒の思いを、次時に、またクラスの生徒に返すようにしたい。

本教材を使った授業から

◆在日朝鮮人問題を扱ったが、差別をしてはならないという意識はあるが、朝鮮人として認めて共に生きるという感覚は、理解しにくいようだ。（加賀江沼）

◆クラスにいる在日朝鮮人生徒を意識して行ったが、本人も含め、他の生徒も、もっと正しい朝鮮と日本との関係を知りたいと考えているようであった。ただ、現状からは、差別ということを深く考えたことがないといった声が、多く聞かれた。

「同じクラスにいるある生徒のことを考えながら聞いていた。私は今まで、そういう見方でつき合ってきたことはなかったので、そういうこともあったのかなあと思った。」

「きちんとした朝鮮観をみんなにもってもらうために、こういう機会を増やしていってほしい。」（加賀江沼）